

年末年始北京大学見聞記 (1986~1987)

Teng Shan (滕妍) 1987年3月記 在北京

「昨年(85)の12・9では北京大学が音頭取りをしたけれど、今年は静かだね」「合肥や武漢ではもう制御しきれなくなっているのに」「北大はデモで先頭に立てなかったから、今年はお上の側の先頭に立つんだ」「『人民日報』に大きく出たね」「鶏口となるとも、牛後となるなかれ」

以上は、A大学B系C教授のもとに集う大学院生、研修教員、学部生あわせて十名ほどで毎月一回開いている“信息交流会”(情報交換会)での一コマである。現在、中国の新聞、雑誌の数は膨大で、現代、当代文学に限ってみても、とても一人ではカバーしきれない。そこでC教授の提案で目ぼしい雑誌をそれぞれ分担して情報を交換しようということになった。気楽な雑談形式だから、文学に限らず、その時々最大の関心事が話題にのぼる。

上の会話に出てくる『人民日報』の記事とは、1986年12月16日『開展群衆性知識性“三結合”自娛活動……北大学生業余文化生活豐富多彩』を指す。音楽会、講演会、ディスコと、年末のキャンパスはにぎやかだったが、とくに興味をひかれたのは、大学の共青团・文学団体が主催した、“芸術節”(文学芸術祭)のうちの二つの講演会だった。芸術祭は“官方”の色濃いお祭りにみえるが、文芸界の権威に挑戦している劉曉波や『中国』編集部を招いての講演会は、デモとは形態を異にした民主化要求の運動だったといえよう。

劉曉波は、北京師範大学の黄葉眠を指導教官とする博士課程の院生で、中国文化の全てをこきおろす(“全盤否定”“罵一切”)痛快さが人気をよんでいる。多くの人々が便利な情報源として親しんでいる『文摘報』でも

たびたびとりあげられた。『深圳青年報』1986年10月3日付に掲載された彼の発言記録『我国新时期文学面臨危機』は、この一文だけを新聞紙一頁の大きさに印刷した一種の海賊版が出回り、北大校内でも売られた。それをまたゼロックス・コピーにかけて回し読みをするというほどの人気である。この文章は、86年秋に上海で開催された“中国新时期文学學術討論会”における劉曉波の発言をまとめたもので、それは『文学評論』(86・6)の当討論会に関する文章の中でも“個別同志認為…”として言及されている。北大での講演は、主に『中国』(86・10)に掲載された『与李沢厚對話……感性・個人・我的選擇』に則ったもので、新鮮さは感じられなかったが、流れるような口調でお経のような抑揚をつけ、思いきり強烈で刺激的な言葉を使い権威を罵倒する彼の話術に、聴衆はおおいに沸いた。エネルギーを発散させてがっている聴衆と、聴衆を興奮させてやろうとする講師の呼吸がピタリとあって、講師の息つきと聴衆の拍手のタイミングが絶妙だった。とくに人々の喝采をあびた部分を録音テープから紹介しよう。

“中国人太須要救世主、太須要別人指導了。比如說、我每次講演、許多人說你要給我們指出一條出路。我沒這個能力、也沒這個義務”（中国人はあまりに救世主を求めすぎる、他人の指導を必要としすぎる。たとえば、私が講演するたびに、多くの方が私に活路を示してくれと言う。私にはそんな能力はないし、そんな義務も無い。）

“每一個時代都有兩種文學、通俗文學和所謂嚴肅文學。在中國大家都說什麼政治干預文學、你要是真寫出來純文學的東西、沒人能干預你、那些行政領導看不懂（拍手）。比如說你要是寫出一書『老人與海』、誰能干預你、你把它怎麼了、但是中國作家寫不出來、中國這種知識分子想去社會中、從各個角度上干預政治、干預政治、政治就干預你。”（どの時代にも二種類の文学があった。通俗文学といわゆる“嚴肅文学”である。中国では、誰もが政治が文学に干渉するなどと言うが、真に純文学

的なものを書きあげれば、誰も干渉できない、例のお役人の指導者は読んでもわからないのだから。たとえば、『老人と海』を書いたとしたら、誰が干渉できよう。それをどうしようというのか。だが、中国の作家には書けない、中国のこの類のインテリは社会に入り、いろいろな角度から政治に干渉しようとする、君が政治に干渉すれば政治も君に干渉する)

劉曉波は、“永遠没有…” “危機”という言葉を連発していたが、これは今話題になっている『醜陋的中国人』（柏楊、湖南人民出版社、台湾版の三分の一程度に削ってある）の中でも、しばしば使われている言いまわしである。挑発的、刺激的な言葉を頻発すると、皮相な印象を与えやすい。彼に拍手を送っていた中国人のうち、どれだけの人がほんとうに中国に対して絶望感を抱いているのだろうか。

翌日（12月18日）は、『中国』編集部の牛漢と二人の青年が招かれた。現代詩について牛漢が語り始めると、何度も失望を表現する拍手が起こった。聴衆は『中国』“停刊”に対する編集部の怒りの爆発を期待していたのである。結局は、聴衆に押しきられて、牛漢は用意してきた話を中断し、ホットな話題へと移行した。丁玲が亡くなって間もなく圧力がかけられ始めたが、文芸界の指導者も作家なのだから、互いに理解できるはずだと思っていた、この幼稚な考えが見事に裏切られ、彼らは“本来不是作家、而是作家領導者”であることがわかった……二人の青年がかわるがわる厳しい口調で語り始めると、場内の空気も緊張してきた。『中国』86年12期が編集部に何のことわりもなく印刷をストップさせられ、編集後記にあたる文章も勝手にさしかえられたことに話が及ぶと冷静に構えていた牛漢もマイクに向かって作家協会の非民主的な措置を罵った。巴金に助けを求めたが“管不了这种事的主席”という言葉が返ってきた。“巴金同志又說出一句真話!”と青年が叫ぶと場内に拍手が湧きあがった。こうして最終的には十分もりあがった講演だったが、企画者側では、もっと直截に停刊事件を語ってほしかったようである。当時は、『中国』編集部独自の1986年12期の準備中であっただろうから編集部は慎重にならざるを得なかったのだろう。

講演会に来る人々の多数はもちろん学生だが、理系、院生、研修教員が思いのほか多かった。年末によく盛んになった小字報を熱心に眺めるのも、学部生にしてはふけて見える男性が中心である。抽象的に民主を叫ぶ小字報より、各地で発生しているデモの“真相”を伝えるものに人気が集まっていた。小字報はデモへの賛否で二種に分けられる。学生デモが保守派に絶好の口実を与えている事実を指摘して、北大の学生に冷静になれと訴えるもの（多くは“小平同志”を守れと言う），“北大在墮落。北大在沈黙。北大有人材、又是一個迷信。”と糾弾したうえでデモをよびかけるもの、いずれにしても、学生デモを紅衛兵になぞらえた『人民日報』に対する反発から生まれたものである。“半官半民の権威ある日本の新聞”として朝日新聞1986年12月22日付のデモに関する記事を翻訳したものもあった。科技大学で万里が“民主は恩賜として与えられるものにすぎない”と発言したという噂の誤り(?)を正すのが目的で、末尾に“為万里平反、賛成方勵之之提出改革建設。冷靜!”とあった。

12月31日には、1月1日に天安門に集合せよとよびかける小字報が出た。友人に聞いてみると、参加するつもりはないが、デモとはどんなものか見てみたいという答えが返ってきた。なかには、『人民日報』の挑発的な態度からみて、中央の指導部が何かを画策しているに違いない、近いうちに中央に変動が起きるかもしれないと危ぶむ声も聞かれた。1月1日のデモについては、日本での報道の方が当地よりも質量ともに充実していると思うので詳しくは述べないが、昼間に捕まった学友の釈放を要求する大群のデモ隊には、さすがに興奮させられた。遠くから聞こえてくるインターナショナルの歌声が次第に高まってきて、デモ隊が留学生宿舎をよぎったときには“民主万歳!外国留学生下来!”のシュプレヒコールがあがった。けれども、私自身に経験がないためか、第三者であるといううしろめたさがあったためか、デモ自体に浮ついた雰囲気を感じたためか、学生とともに“民主万歳”と叫ぶ気にはなれなかった。

漠然と民主を要求しても何も変革されない、と北大内でのデモに対

する評価は総じて辛い。“反対資産階級自由化”のキャンペーンがはられると、デモは完全に失敗だったという意見が多く聞かれた。では、学生たちは敗北感を味わっているかということ、そうも見えない。多くの学生にとって今回の出来事は受動的にとらえられているし、何よりも学業第一という雰囲気が色濃い。そして、何を自己の思想のよりどころにするか、誰もが模索しているようにみえる。劉曉波にしても、危ないことを大胆に言ってのける点で人気をよんでも、オピニオン・リーダーには程遠く、彼の事実関係を無視した極論には、眉をしかめる者も少くない。

最後に、北京大学から離れて見聞したことを記しておきたい。

下放されたまま田舎町に住むある男性は、一連の出来事を複雑な思いでうけとめていた。精神汚染問題のときに十数名の銃殺者を出したというこの町では、春節の休み中も上級に異変が起きたというので、おそろしく緊張していたという。“大都市でデモをやれる者たちは幸せだ。政府は学生のために帰省切符の手配などに力を入れて「招安」したが、孤立している自分たちがそんなことをしたら銃殺だ”こう語るものの、彼にとって、学生デモはやはり大きな励ましである。それは、どれだけ自由と民主が保障されているのかということの指標であり、彼は北京大学の学生に時代の先頭に立ってほしいと期待している。劉曉波も地方では英雄視されていて、彼が1月1日に天安門広場で大演説をぶったという神話も生まれている。北大の内側から見ていると頼りないようなデモも、劉曉波も、格差の大きい中国のある層においては、大きな役割を果たしているのだとおもいなおした。

しかし、層を異にすればまた見方も変わる。河南省のある農民は、商売のために春節も列車の中で迎えると言っていたが、精神的なものへの願望を語る蘭州大学の学生に、世の中は金がすべて、“発財”すれば、郷政府の指導者だってあいさつに来る、民主だ、自由だと騒いでいても、指導者は頭を下げてくれない、とお説教していた。時代の先端を行く者はいったい誰なのだろう。